

Title	Professor Seligman: Essays in economics
Sub Title	
Author	町田, 義一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1926
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.20, No.5 (1926. 5) ,p.685(151)- 690(156)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19260501-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

者と名付くる。かゝる獨占の貨物の價值が、單に制欲と勞働の所産よりも、大なるべきは論を俟たぬ。故に一貨物を以て、自由競争の下に生産せられ従つて勞働と制欲の成果であつて、何等擅有せられたる要因の助力なきものとして之を考ふる場合、決してかゝる貨物の存在するといふのではなく、若し存在するならば、その價格を支配する原理はこれであるといふ意味なのであるといふ(百〇一—十四頁)。

以上述べ來つた價值論の示す處は貨物の大多數たる任意可増財の價值は、自由競争の下に在つては勞働と制欲より成る生産費に歸着する事又、シニョアの謂ふ獨占の加はるものにあつては、廣義の地代も加はる事これである。然も貨物の大多數はかゝる獨占の下にあるを以て、結局、通俗の言葉を以ていへば、大多數の貨物の價值は地代、勞働及び利潤より成る生産費に依つて決定せらるゝと説くに近い。而して價值論よりみれば、生産費は供給の障礙なりと考へられてゐる。

シニョアは、勞働を以て其他の供給障礙と同列に置く事に依つてリカアドオよりも寧ろマルサスに近づき、需要が供給に依頼するの著るしき事を力説する事に依つて、價值論中に於ける供給の意義を、マルサスよりも一段重からしむる。而して生産費中に地代勞銀利潤の三者を認むる事に於て、スマス、マルサスの流を汲む。

既記の如く、チユールジョンはシニョアに限界效用説の先驅者たるの面影を見出すと共に、その明確な潤の少い推論法に依つて、後年の數學派の傾向を示してゐるといふ。併しそれ等は私は研究の未到達の範圍である。この一文の目的は、シニョア自身の價值論が如何なるものであるか、大過なく紹介し得らるれば足る。

新刊紹介

Professor Seligman—Essays in Economics.

The Macmillan Co., New York, Dec., 1925.

町田義一郎

Columbia University の經濟學教授として、また經濟原論、經濟的史觀論、及び租税に關する幾多の著書の筆者として夙に令名ある Edwin. R. A. Seligman 教授は先頃新たに Essays in Economics 及び Studies in Public France の二書を公にされた。共に教授が之れまでに發表された多くの論文並に講演筆記のうち未だ他の自著中に輯められて居らぬもので然かも單なる一時的興味以上に出る——前著序文中の教授の言に據れば all too complaisant critics の斯かく見做す——ものから選んで二卷を爲し主として經濟學に關する論説を前著に又財政學に關するものを後著中に輯録し姉妹篇として出版されたのである。

茲に紹介せんとする Essays in Economics. の方は一八八六年から一九二五年に至る間に起稿された(一)學術雜誌への論文(二)講義及び演説(三)共同編纂の書冊へ寄稿の論説(四)政府委員會の報告等十四章を輯め、之を研究題目に依つて分ければ(一)經濟學史の研究四章(二)經濟理論に關連するもの四章(三)經濟政策に關する三章並に(四)通俗講演一章と教育問題二章から成る。(序文参照)今その内容に就いて一瞥するに第一章第二章は書中最も古い一八八六年の論稿である。第一章 Continuity of Economic Thought. は經濟學の著述に對する Comte の批難を皮相の謬見なりとして

經濟學說の歴史を以て繼續的に漸次發達したものであると説き、その證明として先づ、(一)希臘羅馬時代の經濟思想から中世紀の微利論正當代價論等を窺ひ Mercantilism に及び(二)十八世紀の經濟思想を述べ Voltaire, Quesnay, Turgot, Locke, Hume 等の名を擧げて Smith に終り、(三)正統學派の Malthus, Ricardo を説き McCulloch, Senior, James Mill 等の名々を擧げ之れに對する反動派として(四) Sismondi を初めとして List を語り、或は Welling, Marlo, Proudhon と Thompson, Jones の名を出し、次いで Roscher, Knies, Hildebrand, 並に Schmoller, Held, Brentano, Wagner を擧げ更に翻つて Leslie, Toynbee, Marshall, Ingram, Cunningham に及び斯くして經濟思想は不斷に漸次發達したものであることを表明した。本章は別に新説等を唱へやうとしたものでなく唯だ古來經濟思想の變遷を僅々二十頁に足らぬ小篇中に各時代それぞれの問題をさらへて殆んど總ての著名な經濟學者の名を擧げて説いた教授の手際を之れに見出すことが出来る。第二章 Owen and the Christian Socialists は著者も述べて居る (pp. 22-23) 様に英國社會主義史に關する研究が未だ殆んど行はれて居らず Owen 傳の如きも自傳の外 Holyoake, Sargent 等二三の著はされたものがあるに過ぎぬ時代に在つて教授が率先して此方面の研究に従ひ自ら先づ發表されたものである Owen の生涯と事業を語り、キリスト教會主義に就いてその創設者 Maurice と Kingsley を傳へ、次にその運動の經過並に Socialism と Coöperation の關係を説き結論として英國社會主義の特徴は暴行に對する反對、國家援助の拒絶、及び Coöperation に對する熱心にあるとして一々その由て來る所以を説明し尙ほ章末には Owen 並にキリスト教會主義に關する研究書目を掲げてある。今日では Owen に就いては幾多の研究が發表され又キリスト教會主義に關しても Raven の著書の如きものがあるが併し本章は今尚ほ此方面の研究者には當然一讀せらるべき價値あるものと思ふ。

第三章 On Some Neglected British Economists. (一九〇二年發表) は七十頁に近い卷中第二の長篇である。先づ經濟學史研究が尙ほ未發達の狀態にあることを述べ如何に此方面の研究が不充分なるかを指示する實例ともなり得べきもの——恐らくは——として此章は Ricardo の原論出版後二十二年間に經濟學に關する著述を公にした英國の學者中で之れまで經濟學史家の全然看過し或は輕視して來た若干の經濟思想家を紹介しその説を検討する爲め起稿されたものである。併しそれに先立つて十八世紀末及び十八世紀初葉の學者で等しく史家に依つて看過された人々即ち英國に於て Physiocrats の思想を繼承した匿名の「著者」の The Essential Principles of the Wealth of Nations illustrated, in Opposition to some False Doctrines of Dr. Adam Smith and others, 1797. 及び Sketches on Political Economy Illustrative of the Interests of Great Britain; --- 1809. の内容に就いて瞥見し又財政學上の匿名著書 Enquiry into the Principles of Taxation, 1790. を紹介して本書を「租稅納付者」と「租稅負擔者」を區別せし最初の著書とし、更に此無名者は佛蘭西の Canard より遙か以前に「一般課稅論 (diffusion theory of taxation) を唱へたのみならずその所論は之に或改良を加へたものであり又 Smith の租稅論に關する二誤謬を表明したものと推稱してゐるのである。

次に教授は本論たる Ricardo と同時代の人々に論及して Colonel Robert Torrens を以て (一) Malthus 及び Ricardo とは別個に地代論を發見し、(二) Ricardo の採用した賃銀論を唱道し、(三)比較生産費説——普通その名譽は Ricardo に與へられて居るが——を創見し、(四) Ricardo のそれとは異つた然かも一層眞理に近い利潤論を主張した學者であるを稱讚し之等についてそれぞれ論據を詳細に説き (pp. 71-77) 次いで教授は John Craig の著書 Elements of Political Science, 1814. 及び Remarks on Political Economy, 1821. の内容を窺ひ、利子と利潤との間に明確なる區別を設けぬ彼の弱點を指摘し或は彼を以て價値と效用の關係を力説し、又利潤と賃銀との間の假想された必然的對立の誤りなることを明かにし、そして又土地收入と資本收入との類似を詳述した最初の英國經濟學者

であるを爲してゐる(pp. 77-81)。又當時の價值論に關する著作中から Ricardo の説に反する匿名の二三書に注意を拂ひ、Samuel Bailey の A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value, ... 1825. 及び Cottrell の An Examination of the Doctrines of Value, ... 1831. の内容に就いて述べ (pp. 83-87) 或は W. F. Lloyd を以て獨この Gossen 佛蘭西の Dupuit より早く既に一八三四年に限界效用説を唱へた同説の創設者なりと斷じてゐる(pp. 87-95)。更に以上の外尙は Ricardo を批評する立場に立つ John Rooke の著書の内容を瞥見し、Percy Ravenstone—Foxwell と Menger の英譯の有名な彼の序文中にその名を逸した。を紹介し、Samuel Read と Sir George Ramsay を論じ (pp. 100-102) 轉じて Marginalists たる Mountfort Longfield 及び Isaac Butt に就いて詳論を試みてゐる。斯くて僅かに Ricardo の原論出版後の二十年間にも猶ほ且つ經濟學史の研究上斯くの如く多數の學者が今日まで看過されて居つたことを指摘すると共に之等の一人々の看過され來つた理由を恰も佛蘭西に於ては Cournot 獨りに於ては Gossen が久しく顧みられなかつたのと同様に彼等の所説が當時の有力な學派と見解を異にして居つた爲めであると見做してゐる。教授の説には獨斷或は誇張があるかもしれないが力強いその論斷は本章を讀む者を魅せずには置かねであらう。

第四章 Economics in the United States: An Historical Sketch. は一九二一年起草の Economists の最も新しい論文即ち一九二五年に獨この Brentano 教授の八十歳誕辰紀念論文集に寄稿された Economic Science in the United States. を併せ載せたものである。植民時代、十八世紀末葉、南北戦争に至るまで十九世紀、戦後時代、近代經濟學派に分け二十八頁に亘つて米國に於ける經濟學發達の次第を述べたものであつて Palgrave の經濟辭典の新刊(一九二五年版)中に J. H. Hollander の寄せた The American School of Political Economy. と共に米國經濟學史全般に關する最も新しい研究論文の1である。

以上經濟學史に關する四章の内容に就いてその一斑の瞥見を試みたのであるが己の興味によかせて甚だ冗長に失したるに依つて爾餘の諸問題に關しては單にその表題を掲げて讀者の參考に供するだけに止める。

經濟理論に關するものは An Economic Interpretation of the War (cap. X). The Crisis of 1907 in the Light of History (cap. XII). Economics and Social Progress (cap. XI). Social Aspects of Economic Law (cap. X). 經濟政策の諸篇は先づ書中第一の長論文たる Railway Tariffs and the Interstate Commerce Law (cap. XI). 並に The Immigration Problem (cap. XIII). The Social Evil (cap. XII). 尙ほ先きに通俗講演を稱したのは一九二四年四月某齒科醫會での演説 The Economic Problems of the Modern Dentist (cap. XI). である。又經濟學とは全く別個の教育問題に關する講演筆記を通讀するに一九一六年の Columbia University 第百六十三回の開校演説 The Real University (cap. XIII). 中で大學は國家及び教會と共に社會の三大施設であつて國家は秩序支持者、教會は靈の調和者、大學は解放者であるを見る。そして茲に云ふ解放とは自然の桎梏からの解放、自我の征服、技能の完成、社會的及び政治的正義に對する勇氣等にありとし、眞の大學精神は知的自由の發達を謀ると共に之れを普及する方面を兼備へねばならぬものとす此の點から教授と學生の關係を論じ、或は此精神を脅かす内外の危険を説いてゐる。更に大學の組織に論じて學生、教授、總長及び評議員等の責任を説き、各々の權利よりも責任を重じ之等の一人々が總て心から協働すべきことを求めてゐる。又次の The American Association of University Professors—Its Aims and Its Accomplishment (Cap. XIV). と云ふ同會々長としての演説中にも College と University 或は大學の權利と責任等を堂々と論じてゐるなど最後の此二章は經濟學者財政學者として以外の Seligman 教授の一面を窺知するところの出来る興味深い讀物である。

本書は通卷四百頁に充たぬ何等統一のない論説集ではあるが何れの章を取つて翻讀するも示教されるところの多い所論或は又興味ある講演に出會ひ、流石老大家の著書といふ感を懐かしめられるのである。併しその輯録するうち最近二十年間のものは殆んど十頁内外の講演筆記に過ぎぬのであつて書中の長篇論文は多く一九〇〇年前後即ち約三十年近い舊稿に屬するものであつて此點に聊か物足らなさを覺えるのである。然かも全卷を通じて見るにやはり我々にとつては教授がその壯年時代の元氣な研究心の産物として當時の學術雜誌に寄せられた之等の第二、第三、第六章等の純學術論文に最も興味を感ずるのである。

先頃出版された Edgeworth 教授の Papers Relating to Political Economy. 三卷はその中の一卷全部を割いて批評文を輯めて居るのであるが Seligman 教授は Edgeworth の様に批評文まで集めるとしたら此姉妹篇にも更に一卷を加へるのは容易い事であつたが併し it seemed wiser not to attempt this と殊更本書の序文に書いて居るのである。或は之れ Edgeworth に對する皮肉であらうか。

前號 (第二十卷) 第四號 目次

(大正十五年四月號)

ケネー「經濟表の範式」に就て	三邊 金藏
金融資本網の健實性	向井 鹿松
「社會科學の法則」の哲學的研究	武部與八郎
國富論と初期獨逸經濟學者	町田義一郎

● 冊定價 金五拾錢
● 半年分 金貳圓九拾錢
● 一年分 金五圓四拾錢

郵税金壹錢五厘
郵稅 共

● 編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛

● 營業に關する用件は發賣元宛

● 原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十五年四月卅日印刷納本
大正十五年五月一日發行
每月一回一日發行

三田學會雜誌
第二十二卷 第五號
編輯者 江田 範保
發行所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷者 金子鐵五郎
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
金子活版所

東京市芝區三田貳丁目壹番地

發賣元 丸善株式會社三田出張所

電話高輪 一九二六

● 尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京三田芝 慶應義塾内 理財學會